大内　秀明

8.「廃炉」がだんだん遠くなる

第23回参院選は終わりました。結果は自民圧勝、新議席が65、公明が11、新議席は与党76、対する野党は新議席45にとどまりました。非改選の議席を合わせると、自公の与党が135、野党は107ですから、衆参のいわゆる「ねじれ国会」は完全に解消した。それどころか、野党の一部が協力することになれば、憲法改正も不可能ではない。政権交代は一体何だったのか、政治への期待は裏切られ、政治不信がますます高まるでしょう。

「ねじれ解消」を叫んだ選挙戦でしたが、考えてみれば衆参の二院制である以上、「ねじれ」は当たり前です。「ねじれ」の中で、国民の合意が広く形成され、政治力が発揮される、それが民主主義の政治です。「ねじれ解消」は、自民一党支配に逆行する危険をはらんでいます。恐るべき点は、衆参の「ねじれ」ではない。一党支配と国民の合意が、「ねじれ」てしまう危険性ではないか。

政治と国民の合意との「ねじれ」は、とくに原発問題で拡大しています。原発の再稼働を含め、脱原発が国民の多数の期待でした。その期待は低下するどころか高まる傾向だった。ところが「ねじれ」は、もっぱら衆参の国会の話に矮小化され、脱原発への期待は無視されながら、原発再稼働がなし崩しに容認されている。しかも、原発再稼働が政治の場で議論されず、東京電力を始めとする電力会社の経営問題として、なし崩し容認に向かっている。

「ねじれ国会」の解消は、「決められない政治」を「決められる政治」に正常化する、とのことでした。しかし、脱原発について言えば、「決められない政治」ではなく、世論の動向を踏まえ、「決められる政治」が「決めなかった」のではないか？「2030年代に原発ゼロ」の政府エネ戦略は決定されていたのです。決められたのに、否、決めるべきなのに、いたずらに時間を稼ぎ、なし崩しに電力会社の経営問題にすり替え、再稼働にすり替えながら、既成事実の積み重ねが図られようとしている？まさに「なし崩し再稼働」の現実です。

このような政治手法は、さらに参院選の直後開かれた「エネルギー基本計画」の分科会でも続けられています。上記のように、民主党政権時代に「2030年原発稼働ゼロ」が、「決められない政治」で決められなかったのではない。「決められる政治」だった。また決めておきながら、内外の圧力に屈して「決めなかった」、その結果として「なし崩し再稼働」の道を進んでいる。そして、政権再交代の参院選で「決められる」政治のはずなのに、なお基本計画では「原発比率」を明示しないで、「なし崩し再稼働」に持って行く。このような政治手法が、「自由と民主主義」の現実です。

「なし崩し再稼働」については、福島原発に長年かかわった元ＧＥ社員も「原因究明を含め、事故の後始末はまだ途中、なのに原発を再稼働、あるいは輸出するなんて、あり得ない。原発は放射性廃棄物や使用済み燃料をどう処理するが大切だ。国によってはテロ対策も重要になる。国内でもそれが満足にできないのに、輸出するのは理解できない」（『技術者が見る原発事故』朝日新聞7月12日）専門家が見ても、再稼働や原発輸出は「あり得ない」話です。

福島原発事故は、まだ原因が不明なのだ。地震なのか、津波なのか、その両方なのか？まだ完全に消火していない、現場検証も行われていない、原因が分からない。それなのに「原発新規制基準」が作成され、それが施行され、電力会社が再稼働を申請する。普通の火事でも、現場検証が済まず、原因が分からないのに、つぎの建物を建てることはできない。消防法違反で消防署に叱られる。これが市民の常識です。そんな常識が無視されているのが、いま「決められる政治」の名の下に進められている原発「なし崩し再稼働」ではないでしょうか？

しかも再稼働は、電力不足のためではない。原発ゼロでも夏は乗り切れるし、すでに乗り切った。再稼働の必要性は、電力会社の経営の「赤字の圧縮」のため、さらに「廃炉なら債務超過」で倒産するので、その回避のための「なし崩し再稼働」です。さらに総理がトップセールスで売り込む原発輸出との関係で言えば、輸出で売り込むためには、日本の国内で再稼働の実績がないと困る、だから再稼働が必要というのが輸出関係者の本音なのです。この「なし崩し再稼働」を「決める政治」こそ、自民圧勝による「ねじれ解消」のための参院選だったのです。

27 年前、1986 年 4 月史上最悪と言われるウクライナのチェルノブイリ原発事故が起こりました。当時の発電所の正式名称は、「V･I レーニン共産主義記念チェルノブイリ原子力発電所」でした。1920 年 12 月、レーニンは第 8 回全ロシア･ソヴィエト大会の演説で、電力による重化学工業化の推進を基礎に、「共産主義とはソヴィエト権力プラス全国の電化」と定義した、それを象徴する原子力発電所として開発されたのです。しかし、その 4 号機が試験運転中に爆発を起こし、原子炉がむき出しになった。爆発で放射性物質が放出、北半球全体に拡散しました。その当時、ヨーロッパの多くの住民が野生の鹿の肉や茸の料理を食べなかった。

4 号機が爆発したため、建設中の 5 号機、6 号機は建設が中止されました。1 号機、2 号機、3 号機はどうしたか？国内の電力不足のため、再稼働に踏み切った。しかし、2000 年 12 月に稼働停止。レーニンのロシア革命によるソ連は、原子力発電の爆発と共に、体制の総ての病根が噴出、再稼働した 1 号機、2 号機、3 号機の運転停止と廃炉作業の開始により、「原発国家」社会主義は崩壊したのです。チェルノブイリ原発事故から、わずか 5 年でした。ソ連は崩壊し、マルクス･レーニン主義のドグマは破綻しましたが、ウクライナに打ち捨てられたチェルノブイリ原発は、今日なお廃炉の見通しも立たぬまま、多くの被爆者に苦難の人生を残しているのです。

福島原発事故もまた、チェルノブイリと同じような道を歩んでいるような気がします。